



Midori Art Center (MAC) について

2009 年 12 月青森駅から 10 分程度の古川 3 丁目に Midori Art Center (MAC) がオープンします。
来青するアーティスト御用達の“ホテル山上”に寄生するかたちの 20 m²程度の小さなスペースです。
どんなスペースになるかはこれから徐々に考えていきます。
以下ちょっとした宣言です。

MAC は基本はゆるとまちや生活を楽しむための場所。
そして面白い人と遊びつつ、刺激的なプロジェクトを推進する場所。
でも、いわゆるギャラリーではありません。
作品や商品の販売をするかもしれないし、図書館のように本を貸し出すかもしれない。
どんなスペースになるのかまだ未定だけど、とりあえずは信頼出来る友人を招いて厳かにスタートしてみようと思う。
ということで 12 月 13 日より Midori Art Center (MAC) 始動！
ちなみに山口市の Maemachi Art Center (MAC) は姉妹スペースです。

Midori Art Center (MAC) @ ホテル山上 服部浩之

<http://aomorimac.exblog.jp/>



Maemachi Art Center (MAC) について

山口市湯田温泉「Maemachi Art Center」。
いったい何のスペースなのかは、まだ分からない。
前提として、住居です。あしからず。

『What is MAC?』

「MAC を紹介するファイルをつくってください」と頼まれた。

最近かなり忙しかったし面倒くさかったし、自分でプレゼンとかして「MAC はこうだ！」
て定義するのはなんだか違うと思っていたので、なんとなく気が進まなかった。

それに、「こんなプロジェクトをやってきました、すごいでしょ」って
過去の活動を紹介することにもなんだか違和感があった。
そういうのはブログを見れば充分にわかるわけだし。
そんな感じで、うだうだとどうしようかなって思ってるうちに提出期限が。。。

で、思いついたのだ！

各地に散らばってる MAC に関わってくれてるみんなに「MAC てなに？」って聞いてみて、
みんなの思い描く MAC 像を収集して MAC を描き出したら絶対に面白いに違いないって。

ということで、素敵な友人やお世話になっている様々な方々に急遽お願いして、
MAC の紹介メッセージを寄せていただいた。
こんな面白い資料ってなかなかないよ。

みんなほんとうにありがとう！

服部浩之

『【超簡単】君にもできる!“ぼくらのアートセンター”の作り方 〜レッスン 1:MAC 〜』

<MAC やろうぜ!>

山口、青森、東京(仮)。いま、全国各地に「MAC」という名前のアートセンターが続々と出現し始めてる事アンテナびんびんの君ならもちろん知っているよね?!今日はそんな「MAC」の作り方を君に伝授しちゃいます。時には展覧会場、時にはパーティ会場、時には宿泊施設、時にはオルタナティブスペース(死語)、オッケーオッケーなんでもオッケー。そんな自由空間を君も手にいれてみない?今なら特典として全国MACとの提携付き(注:変な奴らが泊まりに来るかも...)。さあ“ぼくらのアートセンター”を君も手に入れよう!

◎材料

- ちょっと面白い空間(これまでの事例として民家、ホテル、元小学校など。まあ、どこでも良い。)
- ちょっと面白い奴2人以上(やる気があると良いが、別になくても良い。)

◎作り方

- 1、頭文字が「M」となる言葉を考える。この時あまり深く考えないようにする。
(参考:「Maemachi Art Center」,「Midori Art Center」,「Majide Airport Chikai, School」)
- 2、下記の宛先にメールを送り新MAC設立を宣言する。(Mail:maemachiartcenter@gmail.com 担当:服部)
- 3、看板アーティスト 中崎透氏(0※0-1014-4943)に連絡し、看板の制作を依頼する。
(酒を十分に用意しておくとは価格交渉の際に優遇あり)
- 4、気が向いた時に、その土地の、その時期に美味しい食材を使いパーティを開催する。
(なるべく近隣の人や友人に連絡し準備を手伝ってもらおうと良い。まあワイワイやりましょ。)
- 5、気が向けばイベント企画をしても良いが、基本的に気が乗らない時は無理にする必要はない。
- 6、年に何度か恒例イベント開催することを推奨する。しなくても良い。
(参考:「かに革命」,「川床チャリティーパーティ」など)

◎コツ・ポイント

- 特にルールを決めない事を「ルール」とすること。
- アーティストの友達が泊まりに来る際は優しくしてあげなさい。(お願いだよ♪)

山城大督(MAC(Yamaguchi)先住民/アーティスト)

「実は虚から始まる。」

いきなりであるが、脱線してみる。

以前、アーカスという茨城県守谷市にあるレジデンス施設で「Parallel School」という作品を制作したことがある。架空のワークショップを設定して、そのフィクションドキュメンタリー映画を撮るといった内容であった。架空のワークショップのねらいは、過程を通してクラスのようなちょっとしたコミュニティを形成することにあつたのだが、そういう状況を演じているうちに演者たちの中で本当のちょっとしたコミュニティが形成されていってしまう、嘘をついているうちにそれが本当になってしまう状況そのものを作品にしようという試みであった。

極端な話だが、個人的にほとんどの芸術は嘘でできていると思っている。絵画は布と顔料であり、彫刻は木や鉄といった素材であり、写真や映画は光であり、紙であり、布である。そういった意味での嘘である。では、なんでそんな虚構の戯れを人は必要とし、自分も必死で携わっているのだろうとぼんやり考えていた。ペテン師のような芸術家たちの嘘、提示されたイメージは、ときとして、そのイメージがあることによって、それを越える現実が引き起こされることがある。そんなドキドキする瞬間がごく稀にあるからこそ、芸術は必然的なものである、と僕は勝手に思い込んでいる。

さて、ようやく MAC の話になる。上記のようなというかなんというか、MAC が設立してからころころ転がっていく様子は、まさに嘘から出た真というか、でもそれはとても自然の成り行きで、何が言いたいかとなると、そんな MAC は芸術そのものだ、と僕は言ってしまいたい。

ここでの MAC とは山口県山口市にある前町アートセンター (Maemachi Art Center/MAC) と青森県青森市にある緑アートセンター (Midori Art Center/MAC) の二つの施設のことを指す。沖縄県にある前島アートセンターとは特に関連はないということも一言付け加えておく。

2007 年の春の始まるころに、山口情報芸術センター (YCAM) のスタッフの山城大督と小嶋千賀、秋吉台芸術村 (AIAV) のスタッフの服部浩之の三人が湯田温泉にある小川沿いのちょっと素敵なお家軒家で地方都市ではちょっと珍しいハウスシェアを始めた。YCAM から徒歩圏内であったり、両施設のスタッフが近所にちょこちょこ住んでいたり、アーティストがやって来たりするとわらわらと人が集まり、呑んだくれて泊まって温泉に行くとお決まりのコースを体験したあげくに、山口の二つの主要アート施設のスタッフと呑み友達になれ、山口のアート情報をシンプルかつディープに入手できるという、きわめてゆるいのに、とても機能的ななんだかおかしい場所となっていた。そんな中、最もおかしいところを一つ挙げるとすれば、そこがただの家であるというところだろうか。ある日、アーティストがやって来て例のごとく呑んでいると、ここをアートセンターにしよう、という話で盛り上がり、前町アートセンター (Maemachi Art Center/MAC) と命名される。うろ覚えであるが MAC オープニングハプニング「チュラさん事件」が起こったのは、たしかこの翌朝のことではなかったか。以下、当時の日記。

2007.4.19

昨日の朝の出来事だ。

僕は三日程前に、広島から山口に来ていた。

宿泊場所は前町アートセンター (MAC)。

山口でこっそり運営されるできたてのアートセンターだ。

チュラさん事件。

これは MAC の偶発的オープニングハプニングだったのだろうか。

MAC では、一匹のタランチュラ、チュラさんと、

一匹の猫、チロを飼っている。

朝の八時頃、慌ただしい騒ぎで目が覚める。

夜中の間に、猫のチロが、玄関先にあった、

チュラさんの入った虫かごをひっくり返していた。

チュラさんがいない。

飛び散っている木屑。

何故だか、少しだけ開いている玄関。

屋外にいるか、室内にいるか、わからない。

でもどこかにタランチュラがいる。

ちょっとしたパニック。

寝起きな僕は状況を把握しきれないままあたふた。

しばらくして、

「いた！」

玄関の傘立ての陰に身を潜めるチュラさんが発見される。

ホッとするのもつかの間で、

MAC メンバーによるチュラさん捕獲作戦が開始される。

もちろんビビってる。

ゴム手袋をはめていたが、多分なんの効果もない。

さされると、腕が太腿なみに腫れるらしい、という噂だけが何度も飛び交う。

底を抜いたペットボトルの容器でカポッと捕獲成功。

最終段階、そこらいかにかに虫かごに移すか、

厚紙を差し込み、容器をかぶせたまま移送。

虫かごに届く直前、容器がはずれる。

一秒にも満たない緊張が走るが、何事もなく、

チュラさん、我が家に帰る。

途中から一部始終、ビデオで撮影していた。

無事捕獲成功後、ビデオを見返してみる。

よくできた C 級フィクション映像にしか見えなくておかしい。

はて、もしかしたら僕は MAC の三人にはめられたのだろうか。

実はホントによくできたフィクションだったのだろうか。

なんてことを考えながら広島行きのバスに乗った。

前町アートセンター、不思議なことが起こるところです。

山口を訪れるなら、お勧めです。

早いもので、それから三年近くが経つ。最初のメンバーの三人はそれぞれ山口を離れて活動している。現在は、山城大督と入れ替わりで入居したアーティストであり、YCAM のスタッフでもある、あいだいやが MAC で一人暮らしをしつつ運営している。その後の MAC は既存の施設では手に余りそうなプロジェクトを独自に助成金を獲得しつつオーガナイズしてみたり、近所の子供たちや主婦が集まっての相当活気あるワークショップといっても過言ではないような図工教室を定期的で開催したりと、相変わらずのゆるさも含みつつも着実な地に足着いた活動が続いている。一方で、国際芸術センター青森に籍を置く服部浩之は 2009 年末に青森市内に Midori Art Center/MAC をオープンして山口とは全く違った状況の中、ホテル山上というユニークな味のある旅館の一室に寄生するかのようゆるやかに活動を始めた。

これからの MAC はどうなっていくんだろう。酒のネタで、どんどん増殖したらおかしい、47 都道府県の全部に MAC があったらおもしろい、全国の MAC を繋ぐ MAC トリエンナーレとかあったらやばい、などなど、冗談まじりで話している。でも、そういう時は少し気をつけた方がいい、MAC はいつも、冗談みたいなことがホントになってしまったりする場所だから。

中崎透（アーティスト / 遊戯室（中崎透 + 遠藤水城）代表）

名前のちから／場所のちから

MAC は元々、山口県山口市のアーティストが溜まっていた一軒家で、ある日呑みながら話していた時に、その一軒家にひとりが名前を付けたのが発端。看板も制作。住所の前町 + アートセンターで [Maemachi Art Center](MAC)。つまり、ノリで、ただの友人 2 人がシェアする一軒家に、... っぽい名前をつけた。もともとその家にはいろんなアーティストの出入りがあったので、アートセンターではあったわけ。

ただ、名前を付けたら、以前よりそれっぽくなって行くもので、[Maemachi Art Center] で行われていた数々の宴会はアートトークということになるわけで。そして、昨年夏、僕の「花火をあげたい」という希望、プロジェクトを [Maemachi Art Center] は主催し、芸術を発信する施設として町から文化振興系の助成金まで取ってしまった。住人である二人が文才のあるできる人間であることは言うまでもない。いまでは、近所の子どもを集めた工作会はワークショップのようでもあるわけで。変幻自在の何かアートのようなモノの、コミュニティのような施設 / 家になっていった。

そして、ここに住んでいたハットリくんは青森に転勤になって、青森に家とは別にちっさなスペースを借りた。何かが起こる拠点として。ちなみに彼は建築出身。名前はやはり住所の青森市緑をとって [Midori Art Center]、これが MAC 青森。下はハットリくんのこの施設の説明を添付しました。いいよ。

で、変幻自在、増殖する MAC。とりあえず、もっともらしい名前を掲げてみる。きっかけを作って何かを起こす。呑み会でもいいし。するとなんとなく面白いモノが集まってくる。僕もこうして青森に来ちゃったし、オープニングも、梅田くんのパフォーマンスもあって、なんか人集まりそうだし、面白いこと起きそうだ。これは地方だからってのもあるけど、勝手にやってるからなんだろうな。オルタナティブスペースということばじゃない「MAC」。なんだろうこの感じ新しい。ハットリくんの形のない空間のような ...。今からどうなるんだろう、期待。

気になった人、明日是非、青森へ！

MAC はホテル山上って所の一階に寄生するスペース。ホテル山上は青森市内の少し外れのかかなりアンティークな旅館。昨日はこのおとおさんおかあさんがハタハタ鍋をごちそうしてくれる。最高です。食べ終わって座敷でゴロゴロ、ウトウト、ネコ型男子 3 名 (もうひとり ACAC 滞在中の梅田くん)。服部氏はホテル山上がとても気に入ってしまって、ここに寄生して、ホテル山上も体験してもらおうと考えたみたい。これって俺とかトールがはじめた「Re- Fort PROJECT」に近いかもね。面白いものを体験させるために寄生して何かを起こす。うん。これも作品のあり方。与えられたモノに寄生するだけでなく、意識的に場所を決めて、寄生することで、その場所に巻き込む。うん、面白い。

下道基行 (アーティスト)

MAC はなにか途中って感じ。MAC に寄り道。わざわざ招かれたアーティストでさえ、どこかへ行く途中、または帰り道に寄ったのかなって思わせる。場所もそうだ、賑やかな街から駅へ行くときに通り抜ける道。北海道へ行くヒト、東京に帰るヒト、韓国や樺太、NY に旅立つ人もみんな MAC にちょっと寄ってこ。

またけつと

(* 下道くんにサインしてもらったら、またけつとじゃなくマタゲットになってた !!!!! mataquet → mataguet)

真武真喜子 (アート・アーキヴィスト)

私にとって「MAC」は、『あ〜、わたしも“MAC”したーい。』って思わせる、嫉妬しちゃう場所。

野田智子 (ギャラリー勤務)

飲み会というざっくばらんな話し合いの場で萌芽することがあるアートの小さな芽。

形はおぼつかないし、アイデアもまだ突っ込みどころがたくさんあるけれど、それを育ててみようか、というノリに加えてじっくりと付き合ってくれる優しさと誠実さが MAC の魅力。

加えて、MAC は美術館やギャラリーでは実現できないアーティストのプロジェクトをうけとめてくれる包容力がある。戦争遺跡で打ち上げ花火をしたり、展示会場でチャボを飼ったり、日本の公立の施設ではまあ絶対実現できないでしょう。

優しさと誠実さと包容力がある、うーん、こんな男子が増えたら非婚率も下がるのではないだろうか。

いや、ちがった、こんな場所が増えたら、アートの可能性も広がるのではないだろうか。

あ、そうだ。山口にも青森にも美味しい地酒があり、それがこの二つの土地にある MAC の魅力をさらに引き立てていることは言うまでもない。

高橋 瑞木 (キュレーター)

初めてなのに家みたい。
気づけばなぜか料理中。
多いに語り、酔っぱらい
翌朝寝顔にさよならを
言って帰る。そんな場所。

竹久侑（キュレーター）

放浪をいとわない我々が、たやすくどこかで会うための理由

狩野哲郎（アーティスト）

MAC の全国展開、おめでとう。
まだまだ寒いので、風邪など引かないよう、気をつけて。

後々田寿徳（梅香堂 亭主）

MAC。

チュラさん。

服部くんの料理おいしい。

時間ゆっくりしてる。

ごろごろ。

襖ドロ잉。

いつも服部くんの髪型に注目。

静か。

服部くんが自分の時間で自分なりにやっていってるようなのがいいと思います。

おわり。

多田友充（アーティスト）

冗談みたいなノリで始まったと語られる mac であるが、初代住人の服部浩之氏の転勤に伴い青森にまでも進出し、地元山口の友人として、住人たちと mac のアート界における功績は高く評価、期待したいと思っている。

山口県には県立美術館のほかに、山口情報芸術センター (YCAM)、秋吉台国際芸術村 (aiav) という現代芸術を扱う施設がある。また、住民のファン層も比較的厚く、アート事業を支援する民間 NPO もあるが、官営の施設には予算やシステム上での柔軟性や自由度に欠ける部分があり、民間では財力、専門性などの点で力不足という問題点がある。

mac は、専門性を持つ上記施設の職員、キュレーターが住人であるという点で、それらを補う可能性を持っていると思われる。また、自身の住居であることで運営に対する義務感がなく、無理なく続いているところがその創造性を奪われない要因かもしれない。

たとえば、mac では、YCAM や aiav で公演や展示をしたアーティストが宿泊し、一緒にこたつで鍋などを囲んだり、即席のアーティストトークやプレゼンをやったりしている。築十数年かと思われる日本家屋では、住人の先導の下、アーティストと観客が、美術に対して構えることなくくつろいだ雰囲気です話をする場面がよく見られる。

現在、山口 mac においては住人が YCAM の教育普及を担当する会田大也氏に代わり、工作教室などより親子向けの企画が増え、山城大督氏、服部氏の時代とも変化している。また、服部氏は新たに青森でホテルのスペースを利用し、職場とは別の展覧会主体のスペース、青森 mac を運営している。mac という名の器や仕組みはそのまま、地域や住人、アート環境などによって可変なオルタナティブスペースは、今後アートの現場においても重要な役割を果たしていくのではないだろうか。

小笠原瞳（新聞記者）

山口 MAC 向かうぜダッシュ ワックが集まりゃ生まれるサイファー

獺祭片手に握りしめた MIC フォン

ぶち上がってけ西果て on the Pharcyde Brahhhhhhh!!!!

菅沼聖（エドューケーター）

（注）

サイファーってのは
ラッパー路上でセッションを行う際に自然発生的に出来る人ばかり。

ワックてのは
ダサイやつ → 獺祭 とかかっている

MIC フォン
マイクのこと mac とかけてます

西果て
最果て とかけてます

Pharcyde → 実在したヒップホップグループ
far side 裏側 とかけてます

Brahhhhhhh!!!!
ブラザーの意味です

って絶対使わないでしょこれ。
ラップをダジャレだと馬鹿にしてるだいやさんにはこの美学はつたわらないでしょう

いつも近くにある、ほっとする優しい場所。
時には自分を目覚めさせてくれる刺激的な場所。
いつもありがとう。

安光孝代（主婦）

ただ人ん家に遊びに行く感覚で行くのに、
行くとそこには何かあって、
毎度刺激を貰って帰ってくる。
けど、それは押し付けがましいものではなく、
アートを生活の一部として渡してくれる感じ。
あと、人と人が繋がる場所、
そこにはアーティスト、子ども、主婦、おいちゃん、若者、、、
色々な人が集まっていて、美術館やギャラリーと違って、
アートくさいのに人くさい。
山口では、とても貴重な存在で、羨ましい場所やなっと思う。

赤池尚範（カフェ＆バー店長）

わたしにとって、

MACはおじいちゃんちに似ていると思います。
縁側があって、川の流れる音がして、みんなが集まるあったかい場所。
懐かしいようなホッとするような、不思議な気分になってしまうんだよなー。

ホントに、不思議！

角由佳理（臨床検査技師）

楽しいところ。
いろんなことを教えてもらえるところ。

安光隆太郎（小学生）

2007 年 10 月 1 日 (月): 郵政事業が完全民営化

前日は熊本出張の帰りに休みをもらったので服部君に電話をしたら北九州にいるというのでいってみることにした。北九州ビエンナーレで大友さんのライブ。北九州では梅田君遠藤君宮原さんらに会った。原田さんマリオ内山さん山城君丸尾君にもここではじめて会った。飲み屋で宮川さんとカズ君小山さんらとお話しして明けて今日は関門海峡をわたって山口へ。YCAM へ行って阿部さんに施設内を案内いただいてラボの皆さんへご挨拶。そのあとにはじめての MAC。小島さんが迎えてくれてご挨拶。布団を用意してくれた。自転車で 10 分ほどの飲み屋へ行って刺身などを食す。帰りにバーによって店主の赤池くんと鈴木理策のお話。UA が流れていた。MAC に帰ったら中崎君と山城君がいて、TM ネットワークの VHS を見ながらビール飲んで就寝。

2009 年 7 月 22 日 (水): 皆既日食

前日は台風の影響でたどり着けない人が多いなか、竹久さん渡辺さんと海響館へ。関門ダイブの解説は小島さん。会田君下道君三宅君とはじめて会って、服部君山城君中崎君野田さん丸尾君赤池君へ再会のご挨拶。今日は朝のミーティング後、火の山公園で皆既日食とともに対岸からの花火を体験。Re-Fort PROJECT。大川さんや竹下さん梅木さんとひさびさに。有佐君とはこのときがはじめて。下関市場での食事後プロジェクトをまとめて終了。山口へ向かい二度目の MAC。温泉には行って瀬祭をたらふく飲んで明け方に朦朧としながらホテルへ向かう。

2010 年 2 月 15 日 (月): 長島圭一郎が銀メダル、加藤条治が銅メダル獲得

朝 7 時起きで県美で assistant の撤収お手伝い。ラーメンの後服部君中崎君狩野君と合流。三度目の MAC へ。狩野君の展示をみせてもらう。市場でのつけ丼。新幹線へ飛び乗り帰京。MAC はいつも心地よくもてなしてくれるから誰かが東京にきたらいつでもお返しをと思っているけどそれが難しくてもどかしい。なぜか。むしろ、住環境、食生活、気候、人、なにをとっても見窄らしさに向き合ってしまう。MAC にいくともはや東京にいる必要なんてないんじゃない？ だれとなくそう言われているような気分になる。たしかにそうかも。つまらないなにかに固執しているのかも。

斎藤歩（編集者）

MAC は、ゆるやかに自由でいいよね。

お客さんに浸透しつつ、やってることが甘くない。♥

四元朝子（某アートセンター広報）

MAC って？

「革命的で魔法のようなデバイス。しかも、信頼できるユルさで。」

笹尾千草（ココラボラトリー主宰）

日本中に、そしてもしかしたら世界中にも、どんどん核ができていく MAC は、なんだか粘菌みたい。いろんな意味で、そんな気がする。

まずは名乗ることから「はじめる」。すると、そこからいろいろ「はじまる」。さまざまな人を「つなげる」というよりは、自然発生的に「つながる」ためのプラットフォームの整備。主体的に決めるところは決めて、あとは人と人との連鎖によって変わっていくにまかせる。その絶妙なバランスを構造化した MAC のシステムは、ひとつの画期的な発明なんじゃないだろうか。

奥村雄樹（アーティスト）

わたしにとって MAC は、“ご近所さん”。

竹下暁子（舞台制作 / プロデュース）

MAC は、秋吉台国際芸術村、山口情報芸術センターのスタッフのシェアハウスとして運営されてる maemachi art center 通称 MAC です。

ここには、アーティストや近所の子どもたち、そしてホタルも舞い込みます。

サロンのような MAC には、多くのひとが出入りして、立場を超えた関わりが生まれています。

それぞれの暮らしの中で、いつどんな風に感じて、何に対して心を動かされたのか、自分自身に誠実でいられる場所。

そして私たち母親達が、子育て環境が良くなることを願うのは当然なことですが、こうした地域の関わりが、多ければ多いほど環境を整えることに繋がっていき、自然に子どもたちはイキイキ遊び、すくすく育っていくんではないでしょうか。

そしてまた素敵なことはじまりそうな予感です。

津田多江子（主婦）

質問「mac ってなに？」

答え「知らないうちに、自分の会社が、mac スクールというのになってました。いくら我が社が空港にちかいところにあるからといっても「マジでエアポート近い」で mac というのは東京都現代美術館を Mot というのと同じぐらい無理があると思う。。。mac の、ac はもともとアートセンターだったんだろうけど、中心性なんて、ぜんぜんないんだという、強靱にしてふにゃふにゃした奇妙な確信に基づいたアートの運動なんじゃないかと勝手に思うことにしたので加担することにいたしました。」

立木祥一郎（キュレーター）

" 川のほとりという立地条件がうらやましい、夢と希望を育むナイス民家。
また寄せてください!!"
ジューシー (HIFANA / ミュージシャン)

" アートの聖地山口のアート茶屋?"
KEIZOmachine! (HIFANA / ミュージシャン)

" 最高の集い場! 愛と希望を育む一軒家。"
Izpon (KINGDOM AFROCKS / 鎮座 DOPENESS BAND / ミュージシャン)

"ART と HEART が交わるお家."
田中祥史 aka マウピー (GROUNDRIDDIM ART Director / デザイナー)

" 盆と、正月と、アートと、音楽と、科学と、合宿が一緒に来た感じ "
松本剛 aka グルモン (GROUNDRIDDIM PV & Visual Director)

" 本州最西端。クリエイターを繋げる、リアル HUB スポット。"
高野ヨシカズ aka パパノ (GROUNDRIDDIM PV & Visual Director)



yumico_cotaki

1 day ago

@htrhryk MACはツイッターみたいなものだよ！そのころは、ゆるくってつなげる力を持っている。

小滝友見子（フリーアートコーディネーター）



okumura yu(u)ki

1 day ago

@htrhryk いや、、macってのはハッシュタグみたいなもの...とも考えられるかなと思ったのです。だれでも"mac"とつけば参加できる...みたいな。よくよく考えるとぜんぜん違う気もするけど、思い付いたのでつぶやいちゃいました。

奥村雄樹（アーティスト）

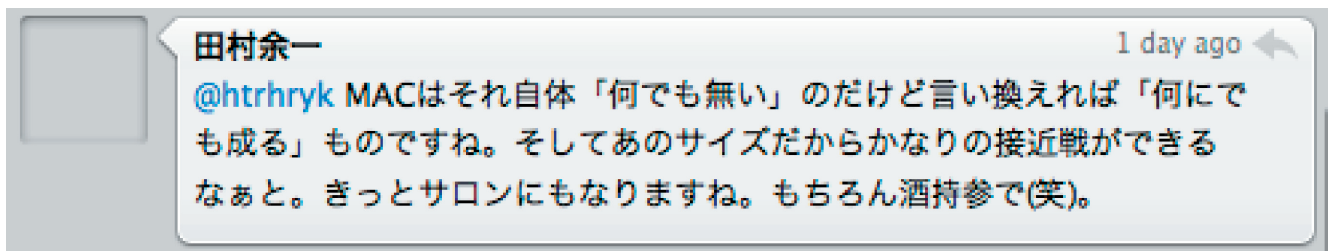


Misato Takada

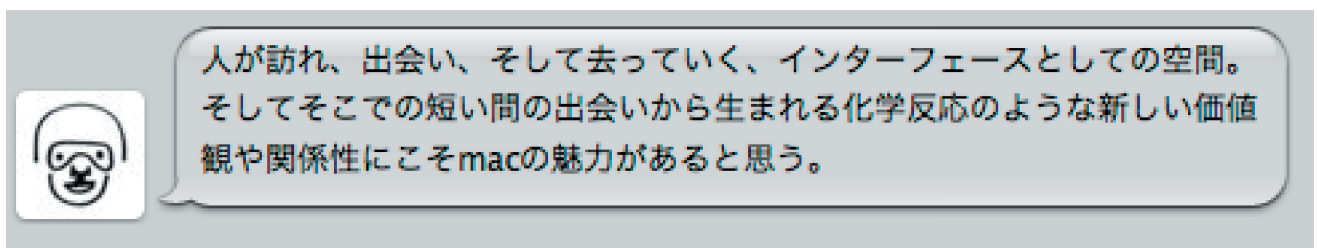
17 hours ago

@htrhryk MACの紹介というよりは、自分の体験談になってしまうけれど、「じゃ、あした遊びにいくねー。」と言って、そのまま5日間くらい居座り続けてしまう場所。そして、毎回必ずはじめましてな人に会う率120%な場所。

高田美里（大学職員）



田村余一（農家／舞踏家）



橋詰宗（デザイナー／アートディレクター）



Re-Fort PROJECT vol.5へいつてきた

[artscape編集部](#) (2009年8月 6日 19:57) | [個別ページ](#) | [コメント\(1\)](#) | [トラックスバック\(0\)](#)

こんにちは。artscape 編集部です (たまには書きます)。

山口へいつてきました。目的はこれ。

「砲台から花火」と聞いて、お遊び?なんて思っていたけれど、たいへんな誤解。本気アートプロジェクトでした。

このブログの少し前のエントリーで、主催者のひとりでもある会田大也さんがまとめてくださっているのですが、プロジェクトの内容はそちらを参照してもらうとして、ここではアートプロジェクトの拠点について、メモを。

会田さんがエントリーのなかでも触れているとおり、このプロジェクトを主催したのは、Maemachi Art Center(MAC)というプライベートのレジデンス施設です。今回、ここへ二度目の訪問をしてきたわけですが、あいかわらず魅力的な施設でした。自宅がレジデンス施設なわけですから、ここの住人にとって「仕事」の境界はいい具合に曖昧で、その曖昧さにご近所や友人たちが巻き込まれ、自然に日常と美術がブレンドしてしまっている、そんな場所です。MAC のブログからもそんな空気が伝わってくるはずですが、たくさんのアーティストが訪れるのも、そんな日常のありかたが作家のライフスタイルと相性がよいからなのでしょう。今回のプロジェクトもこの施設が育んだ「ノリ」の延長そのもので、平日にもかかわらず (!) 各地から駆けつけた撮影クルーを見たとき、ハブの役割をはたすこうした施設のポテンシャルをあらためて実感しました。

そんなことを考えていてふと思い出したのは、金沢の CAAK のありかた。山口も金沢も大規模な公共のミュージアムが近隣にあることが共通点で、どちらも必然的に作家が頻繁に訪れ、住民を巻き込みながら、公共施設ではできないようなイベントがゲリラ的に起こる、という具合です。CAAK を設立して現在ベルギーで研修中の鷺田めろさんもきっと MAC の活動にシンパシーを感じてくれる事でしょう。もしかしたら水戸の環境もすこし状況が似ているのかもしれません。

「若いアーティストは、地方に自由な活動の場があることをよくわかっているよ」。それからこれは、今年の5月に訪問した別府での芹沢高志さんの一言。たくさんのアーティストが東京をはじめとした日本各地からやってきて自主的に作品をつくっている状況を、そう語ってくださいました。脱・東京中心主義なんて言うのは大げさですが、別府や山口で感じたそんな空気も明らかに共通していました。

Re-Fort PROJECT の発起人のひとりである下道基行プロジェクト・リーダーとも今回、移動の車中で活動拠点のありかたについて話しました。去年フランスから帰国し、彼はいま、日本各地を転々としながら作品を制作しているようで、どのタイミングでどこにどのような住処をかまえるか模索中とのこと。ブログにもそんなエントリーがあって、今頃になって時間差でシンクロ。

自分とかと近い世代の友人は、内面的な自分探しとかじゃなくて、自分らしい住処を求めている人は結構多い。どこで暮らすか…。

土地と住民を縛った慣習を、すぐには取り壊せないだろうから、探しながらさまよっているんだと思う。けど、一軒家を持って一人前!みたいな考えは明らかに薄いし、とにかくみんなさまよってるんだと思う。

<http://shitamichi.exblog.jp/10636011/>

美術に携わる人たちがつくるこうした施設のあり方とそこからプロジェクトを生み出すやりかたは、これまでも日本各地で存分に試されてきたはずと思いつつ、ここにきてその現代性がちょっと気になっています。美術館や博物館では、エデュケーションプログラムが盛んですが、真にアートと人をつなぐ存在として、こうした小さな組織のあり方がますます重要になりそうで注目しているのです。

そんなわけで、artscape でもそのあたりを追究すべく、うまい方法を勝手に模索中です (じつはレポーターの目星はついてるんですが!)。これからもたまに書きますので、本体共々お楽しみに。

プロフィール:

あーとすけーぷ・へんしゅうぶ / 都内某所にて日々、編集したり制作したり。粛々と。